豊太郎が手記を書いた理由

1、はじめに

私は舞姫を読み終えたとき、なぜ自尊心の高い豊太郎がいいわけのようなこの手記を書く必要があったのか理解に苦しんだ。よって私はその理由を深く追求することにした。

私は、豊太郎が手記を書いた理由は、自尊心が傷つけられるのを嫌がったためにいいわけを必要としたということと、その裏で誰かに豊太郎の本心を伝えたいという思いがあったのではないかと考える。

2、本論

まず、豊太郎の手記中の表現から考える。自分の勤めているところを某省と書いたり、自分を嘲る留学生を「その名を指さんははばかりけれど」と言っていることから、人目を気にし、名前を出すことをためらったのではないかと思われる。これは他者に向かって書くからこそそう思ったのだ。また、この文章には「あぁ」という感嘆詞が多用されていることや、自分を弱き心、ふびんな心としていることから豊太郎が自分を嘆いていることが分かる。今の豊太郎から見ると、昔の自分は嘆くほどに自分をさらけ出せない人間であったのだ。

次に豊太郎の性格から考える。豊太郎は自分のことを「我が有為の人物なることを疑わず」と言っていることや、手記中に自分を誇るようなことを多く書いていることから自分に自信があり、プライドがあると言える。エリスとのことで免官されたとき、「学成らずして汚名を負いたる身の浮かぶ瀬あらじ」と言っていることからは、汚名を負う、つまり人からの評価が下がり自分の自尊心が傷つくことを嫌がっているのが伺える。

しかし、それと同時に豊太郎は「外物を恐れて自ら我が手足を縛せしのみ」と言っていることからも読み取れるように、自分をうまく表現できない自分のなかに閉じこもった人物であった。また、自分が悩んでいることを誰にも打ち明けることはなかったし、手記中の人物の誰もが豊太郎の本心を知らない。豊太郎が「ああ、この故よしは、我が身だに知らざりしを、いかでか人に知らるべき」と述べていることからは、その時は自分でも理由が分からなかったが、今、手記を書いているこの時は外物を恐れてのことだと豊太郎は認知していると言えるし、だから、他者も私が理解した今なら私の気持ちを理解できるのではないかと思ったのではないか。受動的、器械的な人間であった渡欧前の豊太郎から、人の様々な心に触れ、それによって思い悩むことで、人の心がいかに変わりやすいかを悟るまでに豊太郎は人間的になれたので、昔の言えなかった自分を悔やんでいると言えると思う。

3、まとめ

よってこれらのことから、豊太郎は自尊心がありいいわけが必要であったこと、そして昔の自分は自分をうまく表現できない人物であったために、今この心を他者に理解してほしかったことが理由として言える。

（参考にしたもの・・・教科書）